

英雄になる者たち

しろい凜キチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生を果たした主人公は名前を改めて第二の人生を歩み始める。

そこで待ち受ける数々の出来事とは?!

目次

第2話	第1話
15	1

第1話

まだ夏の日差しが厳しいある日、俺の日常は突如として終わりを迎えた。

『ちよつと待ってくれ。今何だった？』

『だから、お前は死んだと言ったんだ。そして、もし未練があるなら転生しないかってね』

車に突き飛ばされ、死んだと思ったたらいきなり変な場所へ飛ばされ、自称神を名乗る青年と出会っていた。

『ふん、どうせ転生したところでろくな世界がねえんだろ』

『転生先は、

- 1、閃の軌跡
- 2、フェアリーテイル
- 3、デート・ア・ライブ
- 4、T O L O V E ー
- 5、ハイスクールD×D

今のところ、この5つの中からだな』

『全部知ってるが、この中でまだマシなのは閃の軌跡だな』

『よしそれじゃ、特典を言ってくれ。いくつでも構わん』

『なら、

- 1、能力を作る
- 2、剣技、銃技、槍技、格闘技の達人の技術を習得
- 3、どんな状況にも即座に適応出来る判断力
- 4、閃の軌跡の世界観とその知識

これだな』

『なんだ、随分少ないんだな』

うっせ、と思いつながらさっさと送ってくれと手をヒラヒラと振る。

青年は愛想笑いをしながら説明を続ける。

『すまんすまん。それで、送る時間なんだけ……入学の十五年前でいいよな……』

『それで構わねえさ』

『それじゃ転生をはじめろぞ。あ、そうそう。君の新しい名前はジン。ジン・ドラグノアだ』

そう言うのと胡散臭い青年は、何かの呪文を唱え始めた。

そして、最後にこんな言葉が聞こえた気がした。

「良い旅を」

* * *

それからの十五年間、俺は様々な体験をした。

俺が入学するトールズ士官学院があるトリスタにも何度か来たことがある。

そして今日、俺はある人物のツテによりトールズ士官学院へ入学することになった。

『本日はケルティック経由、バリアアハート行き旅客列車をご利用頂きありがとうございます。次はトリスタ、トリスタ。一分ほどの停車となりますのでお降りになる方はお忘れ物の無いようご注意ください』
そんなアナウンスと共に俺の意識は覚醒した。

『俺は…寝ちまつてたのか……。にしてもなんで今頃転生した時の夢なんか』

ふわぁ、と大きな欠伸と伸びをして気持ちを切り替える。

駅を出るとそこは以前来た時と何ら変わらない景色が続いていた。

『へえ、さすがはトールズ士官学院。結構でかいな』

そんな時、ふと疑問に思ったことがあった。

なんで皆緑や白の制服なのに、俺を含めた数人だけが赤い制服なのだろう、と。

『ま、その問題はいずれ分かるか』

とりあえずこの問題は置いておき、校舎へ向かった。

『ご入学、おめでとーございます』

校門をくぐると、ふいにそんな声が聞こえてきた。声のした方向を見ると、緑色の制服を着た小柄な少女と黄色い服を着た太った青年が立っていた。

『君が最後までいいだね。ジン・ドラグノア君——でいいんだよね？』

『あ、ああ。そうだけど……あんたらは？』

『私はトワ・ハーシエル。で、こっちが……』

『僕はジョルジュ・ノームだよ』

『トワさんとジョルジュさん、ですか』

どう見てもトワの方は同級生だよなと思った矢先に補足が入る。

『あ、言っておくけど私はキミより一つ年上だからね』

『あははは……皆トワを見ると同じような反応をしてくんだよ。つと、いったん申請した品を預からせてもらおうよ』

『はい』

俺は予め案内書に書いてあった通りジョルジュ先輩に太刀一振り、銃二挺、短剣二振り、槍一本を渡した。

『——確かに。ちゃんと後で返されるとは思うから心配しないでくれ』

『入学式はあちらの講堂であるからこのまま真つ直ぐどうぞ。あ、そうそう——” トールズ士官学院”へようこそ!』

『入学おめでとう。充実した二年間を送るといいよ』
それから俺は講堂で入学式を終え、特別オリエンテーリングがあるという旧校舎に来ていた。

『——サラ・バレストアイン。今日から君たち” VII組”の担任を務めさせてもらうわ。よろしくお願いするわね』

俺達を旧校舎に連れてきた女性、もといサラ教官は旧校舎に入るなりいきなり自己紹介をしてきた。

『このトールズ士官学院は、去年までは5つのクラスしかなかったの。それも身分ごとに分けたクラスがね』

『去年までは、ということとは今年からはこの” VII組”が立ち上げられた。そしてこのクラスはそれぞれ身分が違い、身分に関係なく揃っている。ということでもいいのか?』

『まあそんなところね』

『冗談じゃない。身分に関係ない!? そんな話は聞いていませんよ!』

俺がサラ教官に聞くと、緑色の髪をした男子が怒鳴り声をあげた。

『えつとたしか君は……』

『マキアス・レーグニッツです!』

マキアスと名乗った男子はさらに教官に抗議の声をあげる。

『サラ教官！自分はとても納得しかねます！まさか貴族風情と一緒にクラスでやって行けって言うんですか!？』

サラ教官が答えあぐねていると、マキアスの隣にいた金髪の男子がさらに続けた。

『フン……………』

『…………君。なにか文句でもあるのか?』

『別に。平民風情が騒がしいと思っただけだ』

『これはこれは…………どうやら大貴族のご子息殿が紛れ込んでいたようだな。その尊大な態度…………さぞ名のある家柄と見受けられるが?』

二人の間には一触即発の空気が流れていたため、俺は気を引き締めいつでも止められる体制に入る。

『ユーシス・アルバレア。貴族風情の名前ごとき、覚えてもらわなくても構わんが』

その名前を聞いたとき、サラ教官以外の全員が驚いていた。

『アルバレア家といえば、東のクロイツェン州を治める”四大名門”じゃないか』

『だ、だからどうした!?!その大層な家名に誰もが怯むと思ったら大間違いだぞ！いいか、僕は絶対に——』

『はいはい、そこまで』

これ以上言い争いが激しくならないための考慮だろう。サラ教官は二人の言い争いに割って入るような形で言葉を続けた。

『いろいろあるとは思うけど、文句は後で聞かせてもらおうわ。そろそろオリエンテーリングを始めないといけないしね』

『そのオリエンテーリングってのはやっぱり門のところで預けた物と関係があるのか?』

『あら、いいカンしてるわね。——それじゃ、早速始めましょうか♪』
そう言うサラ教官は後ろへ下がり、右手側にあったボタンをポチ

リと押した。すると俺達の足元の床が割れ、俺と銀髪の少女以外落ちていった。

『——こらフィー。サボってないであんたも付き合うの、オリエン

テーリングの意味がないじゃない』

そう言つてサラ教官は手に持っていた小型ナイフを投げ、ロープを切つた。フィーと呼ばれた少女はめんどくさそうな顔をしながらも素直に落ちていった。

『貴方もよ、ジン君』

『分かつてるさ。だが、もちつとシンプルな仕掛けでも良かったんじゃないか？いや、コレ自体も至つてシンプルだが、もし怪我でもしたら幸先悪いだろ』

『これも試練の一つよ。それにもし、これぐらいで怪我してたらこの先やっていけないじゃない』

『それもそうか。んじやちよつくら俺も行つてくるわ』

そう言つて穴に飛び込もうとすると、サラ教官に呼び止められた。

『ねえ、あなたの名前。やっぱり…貴方、閃光のジン・ドラグノア本人よね？』

『……………さてな。案外、その名を語る偽物かもしれないねえぞ？』

俺はその次の言葉を待たず、穴へと飛び込んだ。

降りてみるとなぜか黒髪の男子は引っぱたかれ、金髪の少女は怒つていた。

『ええと……………聞かなくてもなんとなく察しがつくが、何があつたんだ？』

『それはラインのためにも聞かないであげてよ』

赤髪の男子にそう言われ、それ以上深くは追求しなかった。

『おいあれ、あそこに何か置いてないか？』

そんなことを言つてると、案内書と一緒に送られてきた携帯用の動力器が鳴つた。

「ひとまず、全員無事みたいね」

『機械から声が!』

『通信機能がついているのか』

「皆が今手に持つてるのはラインフォルト社とエプスタイン財閥が共同で開発した戦術オーブメントの一つ。通称 アーARCUスよ」

『戦術オーブメント……………魔法アーが使えるという特別な動力器のことです

ね』

「そう、結晶回路をセットすることで魔法が使えるようになるわ。というわけで、各自受け取りなさい」

サラ教官が言うやいなや、周りが一斉に明るくなった。

「君たちから預かっていた武具と特別なクオーツを用意したわ。それぞれ確認した上で、クオーツをARCU Sにセットしなさい」

そこでサラ教官からの通信は途切れた。

『ふむ……とにかくやってみるか』

青髪の女子の言葉をかわきりに皆、自分の武器の元へ行き、クオーツを確認しだした。

『これは？』

「それはマスタークオーツよ。ARCU Sの中心に嵌めれば魔法が使えるようになるわ。さあ、セットしてみなさい」

サラ教官に言われた通りマスタークオーツを中心に嵌めると、いきなりARCU Sが光だした。

『この光は……』

「君たち自身とARCU Sが共鳴・同期した証拠よ。これでめでたく魔法が使用可能になったわ。他にも面白い機能が隠されているんだけど……ま、それは追々つて所ね。それじゃあさっそく始めるとしますか」

サラ教官の言葉と同時に、さっきまで閉まっていた扉が開く。

「そこから先のエリアはダンジョン区画になっているわ。割と広めで、入り組んでいるから少し迷うかもしれないけど……無事、終点までたどり着けば旧校舎一階に戻ることが出来るわ。ま、ちよつとした魔獣なんかも徘徊してるんだけどね」

そこまで言うのと少しの間を置き、宣言した。

「それではこれより士官学院・特科クラス”Ⅶ組”の特別オリエンテーリングを開始する。各自、ダンジョン区画を抜けて旧校舎一階まで戻ってくることに」

それだけ言うと、サラ教官からの通信は切れてしまった。

それからしばらくはどうしようか、ということと話し合いになるか

と思ったがそうはならず、結局バラバラになってしまった。

『どうする？俺たちはこの四人で行くか？』

『うんっ、もちろん！……というより、さすがに一人だと心細いよ』

『異存はない。オレも同行させてもらおう』

『ああ、俺たちもまとまっていた方が対応出来そうだしな』

それから俺たちはまず初めに自己紹介をし合うことにした。

『ガイウス・ウオーゼルド。帝国に来て日が浅いから、宜しくしてくれると助かる』

『こちらこそ、よろしく。リイン・シユバルツアード』

『エリオット・クレイグだよ』

『最後は俺か。俺はジン・ドラグノアだ』

俺の名前を聞いた途端、リインとエリオット驚いた顔をした。

『まさか…ドラグノアって、あの閃光の異名で知られているドラグノアか？』

『やっぱ知ってるヤツは知ってたな。………そうだ。俺が閃光のジン・ドラグノアだ』

『驚いたな。まさかこんなところで本人と会えるなんて……それにしてもその長いのって、武器なの？』

エリオットは俺とガイウスが持つてる槍を見ながら質問してきた。

『ん？ああ、これは槍という武器だ。ガイウスと俺のとは少し形状は違うが、まあほぼ同じようなモンだろ』

『へえ……何だかカッコイイね』

『そういうエリオットの武器の方が珍しいんじゃないか？』

『杖……いや、オーブメント動力器なのか？』

『新しい技術を使った武器で、オーバルスタッフ魔導杖って言うんだって。入学時に

適性があるって言われたから使用武具として選択したんだけど……』

『へえ…ま、何にせよ役には立ちそうだな』

『リインの武器はその太刀か？』

『ああ。東方から伝わったもので、切れ味はちよつとしたものだ。その分、扱いが難しいからなかなか使いこなせないんだが』

そう言いながらリインは太刀を前に掲げる。

『ほう、綺麗な刀身だな。使い手のメンテが良いことが良く分かる』
『そういうジンはどんな武器を使ってるの?』

『おれか?俺はな……』

説明が面倒なので手近にあった台に俺の武器を乗せる。

『太刀一振りに銃二挺、短剣二振りに槍一本。これが俺の武具。あとは捕まったり何かあったりしたとき用に格闘技も嗜んでる』

『かなり多いな。持ち運びは不便じゃないのか?』

『そんなことないさ槍は折り畳めるし、他のはどこにだって仕舞えるしな。つと、そろそろ俺たちも行こうぜ』

こうして俺たち四人も出口へ向かって出発した。

そして出口へ向かう途中、

『ふむ、そなた達は……』

俺たちは少し先に出た女子三人と遭遇した。

『遅ればせながら名乗らせていただこう。ラウラ・S・アルゼイド。レグラム出身だ。以後、よろしく頼む』

『レグラムと言えば、かの光の剣匠、ヴィクター・S・アルゼイド子爵が治めている街。そしてあんたの父君がその人、だろ?』

『そうだ』

『そっちの二人はなんて名なんだ?』

俺が問いかけると、眼鏡をかけた女子が礼儀正しく答えてくれた。

『エマです。エマ・ミルステイン。私も辺境出身で……奨学金頼りで入学しました。よろしくお願いしますね』

『そーいやサラがアンタは主席入学者だって言っていたな。勉強面では世話になるかもしれねえから、そんなときやよろしく頼むわ』

『ふむ、随分優秀なんだな』

『あはは……その、たまたまですよ。必修の武術にも縁が無くて……こんなものを勧められたんですけど』

そう言ってエマは、形こそ違えどエリオットと同じ魔導杖を見せてくれた。

『二人の魔導杖の形状が違うのは気になるが、まず自己紹介を終わらせようぜ。それで、アンタはなんていうんだ?』

『……………アリサ・R。ルーレ市からやって来たわ。宜しくしたくない人もいるけどまあ、それ以外はよろしく』

『ルーレ市でRというと、やっぱりあの…………』

『そ、それはいいから、次はアンタ達の番よ』

とまあ少しギクシヤクしたところはあったが、女子三人の自己紹介が終わり、俺たちが自己紹介する番になった。

『最後は俺か。俺はジン・ドラグノアだ。こいつらには話したし、知ってるやつは知っているだろうが俺は閃光の異名で知られている』

俺の自己紹介が終わると、三人は三者三様に驚きを見せてくれた。

『そういえばこれからどうしようか？せつかく合流したんだし、このまま一緒に行動する？』

『いや、これまで通り私達は私達、そなた達はそなた達で行動しよう。残りの二人を見つけるためにも二手に別れたほうがいいだろう』

『了解。何かあったらARCSに連絡くれ』

こうして俺たちは再び別れ、別々に出口へ向かった。

それから少し行っただころの角で、俺は気配を感じ取り足を止めた。

『フィー、だったよな。隠れてないで出て来いよ』

『ふうん。結構鋭いね』

意外にも、サラ教官にフィーと呼ばれていた少女は、潔く出てきてくれた。

『フィー・クラウゼル。フィーでいいよ。もう半分は超えてるからその調子で行けばいい。それじゃ先に行くね』

それだけ言うとフィーは壁を駆け登り、行こうとした。

『一人じゃ危ねえぞーリイン、俺は彼女を追う。だからお前らは後から来い』

俺はまくし立てるように言うと、フィーのあとを追った。

『フィー、一緒に行こうぜ』

『別に一人でも大丈夫。慣れてるから』

フィーはなおも俺の提案を跳ね除けて、行こうとする。それに対し

俺は行かせまいと手首を掴んだ。

『そういう問題じゃねえんだよ。……………とりあえず自己紹介だけでもさせろ。俺はジン。ジン・ドラグノア』

『ジン……………ジンってあの閃光の?』

『ああそうだ。あいつらはともかく、俺くらいなら足手まといにならねえからいいか?』

『……………ん。いいよ』

俺はファイに礼を言うと、一緒に行くことにした。

『そういえばファイ、さつき妙な気配を感じなかったか?』

『感じたよ。見に行ったら何もなかったけど』

『そうか……………俺をその場所まで案内してもらえないか?』

『ん。分かった。ついて来て』

俺はファイに付いて行き、妙な気配があった場所へ行った。しかし先ほどファイの言った通り、辺りには何もなかった。

『ファイ、ちよつと下がってろ』

『分かった』

ファイに離れるよう指示した俺はその場で短剣二振りを取り出し、

『我流剣術 参ノ型伍番・斬昊!!』

——我流剣術 参ノ型伍番・斬昊

様々な剣術を元に我流に編み出した剣技の一つ。短剣一振りで風を起こし気配を読み、二振り目で敵を切りつける。

すると、

『グオアアアアアア!!』

切りつけた石像が魔獣になった。

『ほう……………ここで登場するってことは、やっぱこのオリエンテーリングの最終試練ってことだよな?ファイ、二人で一気に片付けるぞ』

『了解』

俺は武器を太刀に持ち替え、戦闘態勢に入る。ファイも二挺の銃剣を構え戦闘態勢に入る。

『行くぜ魔獣!我流剣術 ”水碧の構え” 壺ノ型肆番・三散』

——”水碧の構え”

これは数ある技を出す際、どの姿勢から放つのが攻撃力が増すのかを試した上で、編み出した構え。右手で持った太刀を肩に乗せ、重心を低くすることにより脚力での瞬発力を生かした攻撃に派生出来るため、あらゆる型に応用が利く。

——我流剣術 壺ノ型肆番・三散

相手の懐に一瞬で潜り、三度の居合い切りをお見舞いする。

『グギャアアアアアア!!』

魔獣の弱点を狙った攻撃は見事に当たったものの、まだ倒れる気配はなかった。

『フィー、バラバラな攻撃じゃ埒があかねえ!ここは一気にいくぞ!!』
俺はフィーと連携をとり、お互いの攻撃の隙間を埋めるように攻撃を仕掛ける。

そしてついに、

『グギャアアアア……ア……ア……』

魔獣は最後の断末魔と共に息絶えた。

『オリエンテールリングも案外楽なもんだったな』

『こ、コレは!?!』

そうしているうちに他のⅦ組のメンバーが集まってきた。

『おーっすお前ら。とりあえずやるもんやったし、そろそろ出ようぜ』
こうして俺達の特別オリエンテールリングは幕を閉じた。

………はずだった。

『ジン、後ろー!』

『ん?つぐ!!』

倒したと思っていた魔獣がいきなり襲いかかってきた。

『ちっ、油断した。おい皆、こいつを速攻で片付ける。手を貸してくれて』

そしてみんなの息のあつた攻撃の末、ラウラが首をはね飛ばし、今度こそ魔獣は息絶えた。

『最後のアレは何だったんだ?今回が初顔合わせのはずだが、まるでお互いの攻撃の間合いが手に取るようだった……』

『あれこそがARCCUSの真価よ』

声のした方を向くと、そこにはサラ教官が立っていた。

『いや、やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね。うんうん、お姉さん感動しちゃったわ』

『サラてめえ、見てたなら助けやがれー!』

『まあいいじゃないの、結果的には勝てたんだから。つと、これにて入学式の特別オリエンテーリングは終了なんだけど……』

『待ってくれサラ、特化クラス。』Ⅶ組『って一体何を目的としているんだ?』

俺がサラ教官に尋ねると、少しの間を置いて答えてくれた。

『君たちが』Ⅶ組『に選ばれたのは色々な理由があるんだけど……一番判りやすい理由はその”ARCUS”にあるわ』

『コレに?』

サラの言葉で俺たちは一斉に自分のARCUSを見る。

『エプスタイン財団とラインフォルト社が共同開発した最新鋭の戦術オーブメント。様々な魔法^{アーツ}が使えたり、通信機能を持っていたりと多彩な機能を秘めているけど……その真価は”戦術リンク”——先ほど君たちが体験した現象にある』

『皆が繋がったような感覚のことか。確かにお互いの行動が把握出来ればあらゆる作戦行動が可能になるな』

『そう。……でも現時点で、ARCUSは個人的な適性に差があつてね。新入生の中で、君たちは特に高い適性を示したのよ。それが身分や出身に関わらずに君たちが選ばれた理由でもあるわ』

『なるほど。理に適ってるな』

* * *

『ツールズ士官学院はこのARCUSの適合者として君たち十人を見出した。でも、やる気のない者や気の進まない者に参加させるほど予算的な余裕があるわけじゃないわ。それと、本来所属するクラスやりもハードなカリキュラムになるはずよ。それを覚悟した上で”Ⅶ組”に参加するかどうか——改めて聞かせてもらいましょか?』

そう言われ、皆は少し考え込んでいた。

『あ、ちなみに辞退したら本来所属するはずだったクラスに行っても

らうことになるわ』

サラは皆の意見を尊重するとはかりにこの件を告げてきた。

『——俺はこの”Ⅶ組”に参加させてもらうぜ。どうせここで二年間学ぶことになるんだ。だったら少しは面白そうなクラスのがいいしな』

『リイン・シュバルツァー。俺も参加させてもらいます。……両親に我侪を言っ行って行かせてもらった学院です。自分を高められるのであればどんなクラスでも構いません』

『——そういう事ならば私も参加させてもらおう。元より修行中の身。此度のような試練は望む所だ』

『——俺も同じく。異郷の地から訪れた以上、やり甲斐がある道を選びたい』

『私も参加させてください。奨学金を頂いている身分ですし、少しでも協力させていただければ』

『ぼ、僕も参加します……！これも縁だと思っし、みんなとは上手くやって行けそうな気がするから』

『——私も参加します。テスト段階のARCSが使われているのは個人的には気になりますけど……この程度で腹を立てていたらキリがありませんから』

『私はどっちでもいい。サラが決めていいよ』

『だめ、自分の事は自分で決める約束でしょ？』

『めんどくさいな。じゃ、参加で』

『……ユーシス・アルバレア。”Ⅶ組”への参加を宣言する。アルバレア家からしてみれば、他の貴族も平民も同じようなもの。勘違いした取り巻きにまわり付かれる心配もないし、むしろ好都合だろう』

『——マキアス・レーグニッツ！特科クラス”Ⅶ組”への参加を宣言する！古ぼけた特権階級にしがみつく、時代から取り残された帰属風情にどちらが上か思い知らせてやる！』

こうしてお互いの理由は違えど、全員の参加が決まった。

『これで十名、全員参加ってことね。——それでは、この場をもって特

科クラス”Ⅶ組”の発足を宣言する。この一年、ビシバシしごいてあげるから楽しみにしてなさい!』

そして今日は俺達がこれから生活することとなる第三学生寮に案内され、一日が終わった。

第2話

四月十七日（木）

『ふっふっふっふっ』

俺は日頃からカンを失わないように、毎朝早くに鍛錬をするのが日課になってきていた。

『……………フィー、いつも言ってるだろ。俺に対しての隠密は不可能だって』

誰もいないはずの場所に話しかける。すると、いきなりフィーが姿を現した。

『これでもダメか……………やっぱりジンはすごいね』

『気に病むことはないさ。実際、会った当初に比べたら格段と隠密の性能は上がってるしな』

俺はそういいながらフィーの頭を撫でる。

フィーも気持ちよさそうに目を細めていた。

『さて、それじゃ時間も時間だし学院に行くか』

『うん』

この一連の流れが日々の流れとなりつつあった。

その日の放課後。

『ジーン。起きて』

俺の日中はいつも通り寝て終わった。

ただいつもと違ったのは、フィーが起こしてくれたことぐらいだ。

『んー、どうした？』

『どうしたじゃないわよ。朝からずっと寝てばっかで、私の話を聞いてたのかしら？』

『マジすんません。反省してますんでその銃を降ろしてください』

銃身を額に当てられ、俺はそう言うしかなかった。

『はあ……………全く、寝ることが悪いとは言わないからせめて私の話だけは聞いてちょうだい』

『マジすんません』

『もうそれはいいわ。それと前にも伝えたと思うけど、明日は”自由行動日”になるわ。厳密に言うとは休日じゃないけど、授業はないし、何をするのも生徒たちの自由に任されているわ。——それと来週なんだけど。水曜日に”実技テスト”があるから』

『実技テスト?』

『ま、ちよつとした戦闘訓練の一環つてところね。一応評価対象のてすとだから、体調には気をつけておきなさい。そして——その実技テストの後なんだけど、改めて”Ⅶ組”ならではの重要なカリキュラムを説明するわ』

『やつと特別なカリキュラムとやらが何なのかわかるのか』

『ま、そういう意味でも明日の自由行動日は有意義に過ごすことをお勧めのするわ』

そんなことでHRは終わり、サラは出て行こうとしたが、

『あ、そうそう。ジン、あんたは寝ていたバツとしてこの後生徒会室に行つて受け取つてきて欲しいものがあるのよ』

『うへえ……なんで俺が』

『自業自得よ。生徒会室は、この本校舎の隣の”学生会館”にあるわ。それじゃ、よろしく頼むわね』

そう言つてサラは今度こそ出て行つた。

『じゃあねえ、行かないで後で銃突きつけられるよかマシか』

俺は渋々と生徒会室へ向かつた。

『……か、失礼します』

ノックをすると、女子生徒の声が聞こえてきたので断りを入れ中に入る。

『誰かと思えばトワさんか、入学式ん時以来ですわ』

中には以前会つたトワさんがいた。

『あ、君はジン君だったよね。ここに来てことはサラ教官の用事かな?』

『ええ、サラのやつやたらと俺にだけ当たりが厳しくて。それにしてもまさかトワさんが生徒会の人だったとは……』

『私はこの学院の生徒会長をやっているんだ。改めてよろしくね、ジ

ン君』

『ごちらこそよろしくお願いします。それで、サラから頼まれてたものについて何ですが……』

『そうそう、これなんだけど……』

そう言つてトワさんが渡してきたのは十冊の学生手帳だった。

『ごめんね、君たち”Ⅶ組”はちよつとカリキュラムが他のクラスと違つて……”戦術オーブメント”も通常とは違うタイプだから、別の発注になつちやつたんだ』

『トワさんが謝ることじゃないですよ。それより、これを皆に届ければ良いんですね?』

『うん。それよりジン君達は一年なのにすごいなく』

『え?』

『サラ教官から聞いたよ。生徒会のお仕事を手伝つてくれるんでしょ?』

それを聞き、俺は内心でサラに向かつて悪態をついた。

『そういう事ですか……正直面倒ですが、トワさんの為になるならやりますよ。つと、それから、今日はまだ仕事とかあるんですか?』

『うん、教官に頼まれた資料の整理とかこれからやるところだよ』

『なら俺も手伝います』

『え? いいよいいよ、これぐらいいつもやつてることだし、すぐ終わるから』

『ならなおさら手伝いますよ。二人居ればもつと早くなるでしょ?』

『ありがと……それじゃお言葉に甘えちやおうかな』

こうして俺とトワさんは手分けして残りの仕事を片付けた。仕事が終わる頃には、俺たちはすっかり打ち解けていた。

『今日はありがとねジン君』

『いいさ。それよりホントに敬語じゃなくていいのか?』

『うん。今日手伝つてくれたお礼と言っちゃなんだけどね』

『………分かった。それじゃあまた明日』

『また明日ね。依頼はジン君のポストに入れておくから』

……で俺とトワさんは別れ、俺は第三学生寮に戻った。

その日の夜、俺は学生手帳を渡すために各部屋を訪れていた。

『ここで最後か……フィー、入ってもいいか？ 渡したいものがあるんだが』

『ん、いいよ』

フィーに要件を告げると扉をあけてくれたので、中に入る。

『ほれ、これがフィーの学生手帳だ』

『ありがと……ふわぁ』

『寝てたのか？ だったら邪魔して悪かったな』

『別に。それより、明日って暇？』

『トワさんからの依頼がどれくらいかにもよるけど、多分暇だぜ』

『ん、暇になったら連絡して』

『了解。んじやおやすみ』

それだけ言い残し、俺は部屋を後にした。

* * *

四月十八日（日）

『……………』

『あれ、ジン君？ こんなところで何してるの？』

早朝、俺が精神統一しているとトワが話しかけてきた。

『おはよう。精神統一してたんだ。何事も集中力は大切だからね』

『そっか。邪魔しちやったかな？』

『いや、丁度終わりにしようと思ってたところだから気にすんな』

『ありがと。あ、そうそう、これ今月分の依頼だよ』

俺はトワから封筒を受け取り、中を確認する。

「課外活動の封筒（四月）」

・旧校舎地下の調査

・動力器の配達

・落とした学生手帳

『確かに。でもわざわざ届けてくれなくても、連絡くれればいつでも取り行くのに』

『それは悪いよ。ただでさえ手伝ってもらってるのに』

『まあそれはそれ、これはこれとしてだ。この依頼は今日中に片付け

たつて問題ないんだよな?』

『いいけど、あんまり無理しちゃダメだよ?』

『了解』

それだけ話すと、トワはほかの仕事があるとかで帰って行った。

俺は依頼内容を確認し、すぐに行動に取り掛かった。

意外にも落とした学生手帳もすぐに見つかり、配達もスムーズに終わったのである程度時間に空気が出来てきた。

『さてと、このあとどうすつかな………つと、そろそろアイツに連絡入れねえと』

俺はARCUUSを取り出し、ある人物に通信を入れる。連絡を入れると、その人物はすぐに出てくれた。

「やあ、ちようど君からの連絡が来る頃じゃないかと思つてたよ。調子はどうだい?」

『かけてすぐに出るたあ、お前も随分暇人だな』

「ははは。君は相変わらずだね。で、どうだい例の件は」

『んにや、今のところ標的ターゲットに目立った動きは無し。引き続き監視するや』

「そうかい。それじゃよろしく頼むよ、親友」

『ああまたな、親友』

それだけ話すと、俺は通信を切った。

『さてと、そんじゃ集められる奴集めて旧校舎行きますか』

俺は手早くみんなに連絡し、来られる人は来いと伝えた。

『今回集まったのは……リインにエリオット、それにガイウスか。サンキューな三人とも』

『この場所はまだ怖いけど、少しでもみんなの力になれるといいな』

『俺も剣の修行になるだろうからな。よろしく頼む』

『同じく、槍の修行をしに来たんだ。よろしくな』

『おう、三人とも期待してるぜ』

早速、俺たちは四人で旧校舎へ入っていった。

『この部屋……なんだか少し狭くなつてないか?それに、以前来たときはあんな扉なんてなかったはずだ』

以前ガーゴイルと戦った場所に来てみると、誰が見てもわかるくらいの変化が起きていた。

『とにかく降りて扉の向こうを確認してみるか』

『つてココ、完全に別の場所じゃない!?僕たち、こんな場所通らなかつたハズだよね!?!』

扉の奥へ進むと、そこでも変化は起こっていた。

『このことから考えても、学院長が言っていた旧校舎の異変はますます信憑性が高くなったな』

『どうやら徘徊している魔獣の気配も違っていているようだ』

『みたいだな。とりあえず、行けるとこまで行こう』

俺たちは注意深く、迅速に奥へと進んでいった。

—— 第一層、最奥。

『何も無いみたいだな……!?なにか来るぞ、各員戦闘準備!!』
すると、突然空間から魔物が現れた。

『はああく……さすがに危なかつたあ……。でも、何とかなつたね』

『あれぐらい楽勝だろ。”戦術リンク”のコツも掴めてきたしな』

『どうやらここが最終みたいだな』

『だな。他に行くルートもないし、ここで切り上げよう』

そして俺たちは旧校舎から出て、報告するため学院長の元へ向かった。

『ふむ……それは予想外の事態じゃな』

『……地下の構造が丸々変わってしまったか。不思議な遺跡だとは思ってたけど、まさかそこまでだったとはね』

『あの遺跡は誰が、いつ建てたものなんだ?見た感じ、結構経つてると思うんだが』

『誰が建てたか——というのは実は判っておらん。だが、この学院の設立以前からあの場所にあったのは確かじゃ。おそらく数百年前……”暗黒時代”のものじゃろう』

『暗黒時代っていうと千二百年前の”大崩壊”の後、しばらく続いた混沌の時代のことだよな。確かに、あの時代に出来たのなら今回のよ

うな出来事も不思議じゃないか』

その後、俺たちはその事について対談をし、学院長室を後にした。ちなみに旧校舎の鍵はというと、引き続き調査をしてもらいたいということから俺が預かった。

『お、いたいた。ファイ』

学院長への報告を済ませた後、俺はファイに連絡して待ち合わせの場所に来ていた。

『すまん、こんな時間になっちまって』

『別に。気にしてないからいいよ』

『そっか。んで、話つてのは?』

『そんな大した話じゃないんだけど、ジンの過去について知りたいと思つてね』

『俺の過去?』

『ん。前に魔物と戦ったとき、なんだか集団戦闘慣れしてたようだったから気になってね。駄目ならそれで構わない』

と言つてはいるが、ファイはすごく聞きたそうにしていた。

『まあ別に隠しておくほどの事じゃないから、いいぜ』

『ありがと』

ファイはお礼の言葉とともに、自然としっかり聞く姿勢になつていった。

『俺の戦い方は元々、個人戦闘スタイルだったんだ。でもある日を堺に俺の戦い方は、個人戦闘スタイルから集団戦闘スタイルへと変わった』

『ある日つて?』

『その日も、いつもと変わらずごく平穏な日になるはずだった。でも突然、そこに賊が押しかけてきて親父達を殺していったんだ。たった一人残された俺は途方もなくさまよつていた。そんな時、ある傭兵団と出会ったんだ。その名前は、レッド・スコビーオンス赤き蠍』

『その名前、私も聞いたことある。確か帝国一強い傭兵団だったよね?』

『ああ。俺の今の戦い方はその団の団長さんに教えてもらった基本形

を個人的にアレンジしたものだ』

『でもたしかあそこって……』

『五年前に崩壊した。仲間内から裏切り者が出て、団長は殺された。そこからはまるでビルが崩れるかのような勢いで団は崩壊していった』

ここでほんの少し間を空けてフィーを見てみると、なんだか少し暗い表情になっていた。

『それはからはまた宛も無くさまよい続け、そして俺が”閃光”の異名で知られるようになったのが、つい三年前。そして、今に至るってわけだ』

『そんなことがあって、ジンは辛くなかったの？』

『……そりゃ当時は辛かったさ。でも人は出会いと別れを繰り返す生き物だ。それを考えたら辛さも抑えられた。それにその過去があったからこそ、今こうしてフィーと話してられるわけだからな』

『そだね……話してくれてありがとう』

『おう。つと、もうこんな時間だ。早く帰らねえとサラにどやされちまう。急ぐう』

『うん』

その後俺たちは案の定、サラにこっぴど絞られた。

* * *

四月二十一日（水）

実技テスト当日。

俺たちは今各々の武器を持ちグラウンドに集合させられていた。

『——それじゃあ予告通り”実技テスト”を始めましょう。前もって言うておくけど、このテストは単純な戦闘力を測るものじゃないわ。”状況に応じた適切な行動”を取れるかどうかを見るためのものよ。その意味で、何の工夫もしなかったら短時間で倒せたとしても評点は辛くなるでしょうね』

『やってやろうじゃねえか』

『……単純な力押しじゃ、評価には結びつかないわけね』

『——それではこれより、四月の”実技テスト”を開始する。ライン、

エリオット、ガイウス。まずは前に出なさい』

『なあサラ、これはお前と戦えばいいってことなのか？』

『ふふ、それはね……………』

そして次の瞬間、サラが指を鳴らすと、

何も無い空間からいきなり傀儡のようなものが現れた。

『これは？』

『こいつは作り物の”動くカカシ”みたいなものよ。そこそこ強めに設定してあるけど、決して倒せない相手じゃないわ。例えば——AR CUSの戦術リンクを活用すればね。それでは始め！』

リイン達三人組は途中危なっかしい所もあったが、戦術リンクを使いなんとか倒した。続くラウラ、エマ、ユース組も、フィー、アリサ、マキアス組も同じようになんとか倒せていた。

『なあサラ、最後俺だけなんだがどうすりゃいいんだ？』

『あなたは私との一対一の戦いよ』

『……………え？マジで？』

『マジもマジ、大マジよ。いいから早く用意しなさい』

こうして、俺とサラは一騎打ちをすることとなった。

『す、すごい。あのサラ教官を終始圧倒していた』

『ぼ、僕には到底無理だな…』

『サラもまだまだだね』

『まあなんにせよ、これで全員実技テストが終わったわね。』

——さて、先日話した通り、ここからはかなり重要な伝達事項があるわ。君たち”Ⅶ組”ならではの特別なカリキュラムに関するね』

それを聞いた瞬間、俺を含めた全員が息を呑んだ。それだけこれから話す内容が気になっていたのでだろう。

『——それじゃあ説明させてもらうわ。君たちに課せられた特別なカリキュラム…………それはズバリ、”特別実習”よ！』

『と、”特別実習”…………ですか？』

『なんだか嫌な予感しかしないんだが…………』

サラはみんなの意見を無視するように続ける。

『君たちにはA班、B班に別れて指定した実習先に行ってもらおうわ。そこで期間中、用意された課題をやってもらおうことになる。まさに特別な実習なわけね♪』

『まだ学院に入って間もないのに、もう他の場所へ行くのか?』

『……その口ぶりだと、教官がついて来るといっわけでもなさそうですわ?』

『ええ、あたしが付いていったら修行にはならないでしょ?獅子は我が子を千尋の谷につてね』

『それは分かったが、結局のところ、何時どこに行けばいいんだ?』

みんなが思ってるであろう疑問を俺がぶつけると、サラはどこからか十部の紙束を取り出し、それぞれに配った。

配られた紙束を見ると、そこには今回の特別実習について書かれていた。

「四月特別実習

A班：リイン、アリサ、ラウラ、エリオット、ジン

(実習地：交易地ケルディック)

B班：エマ、マキアス、ユーシス、フィー、ガイウス

(実習地：紡績町パルム)」

『これまた何と言うか……すごい班分けだな。それに確かケルディックが東にある交易が盛んな場所で、パルムが西にある紡績で有名な町だったよな』

『日時は今週末。実習期間は二日くらいになるわ。A班、B班共に鉄道を使って実習地まで行くことになるわね。各自、それまでに準備を整えて英気を養っておきなさい』

この日はこれだけで終わり、各自解散となった。

* * *

四月二十四日 (土)

特別実習当日。

この日も俺は朝早く起き、日課のトレーニングをしていた。

それから時間が過ぎ、みんなが出てきた。

『おう皆、もう準備は大丈夫なのか?お、アリサとリインはやつと仲直

りしたのか?』

『も、もうそのことはいいのよ』

『ま、当人同士がそれでいいなら俺からは何も言うことはねえな』

『トレーニングしてたようだけど、ジンは何時に起きたの?』

『俺か?俺は四時には起きてたぞ』

『『え!?!』』

俺が起きた時間を教えると、アリサ、リイン、エリオットの声が見事に重なった。

『別に驚くことじゃねえだろ。の時間に起きてトレーニングしてんだし』

『そ、そうなんだ』

『うし、みんな揃ったし駅まで行こうぜ』

『『『そうだな(そうね)』』』

俺たちはトリスタ駅に向かい、電車を待つことにした。

駅の中に入ると、もう既にB班のメンバーが揃っていた。

『よう皆、おはよう。そっちはそろそろ出発か?』

『ええ、B班のパルム市はここから結構離れていますから。今から出発したとしても夕方近くに到着する見込みです』

『いろんな意味でそっちの班大変だな。なんつーか、その…頑張れ』

『あははは……』

『まもなく二番ホームに帝都行き旅客列車が到着します。ご利用の方は、連絡階段を渡ったホームにてお待ちください』

そんなことを話していると、アナウンスが流れてきた。どうやらB班乗る列車がもうすぐ到着するらしい。

『初めての特別実習……お互い頑張りましょう』

『ふふっ、はい』

そして俺たちは別れ、俺たちも自分たちの乗る方面のホームへと向かった。

列車内にて。

『実習地につく前に一応おさらいしておきましょう。』

交易地ケルディック——帝国東部、クロイツェン州にある昔から交易が盛んな町ね。帝都と大都市バリアハート、更には貿易都市クロスベルを結ぶ中継地点としても知られているわ』

『このあたりは昔から大穀倉地帯としても有名だ。農作物全般からバリアハート特産の宝石や毛皮、大陸諸国からの輸入まで……一年を通して開かれる大市では様々なものが商われているらしい』

『しかし、特別実習するのは何をするのかさっぱりだな。士官学校である以上、厳しいものが想像できるが……。つかサラ、なんであんたがここにいるんだよ』

俺の言葉でみんなは一斉にサラの方を見て驚いていた。

『VII組A班、全員揃ってるみたいね。ちゃんと仲直りもして、まずは一安心ってとこかしら？』

『だからなんであんたがここにいらんだっての』

『んー、最初くらいは補足説明が必要かと思ってね。宿にチェックインするまでは付き合っただけよ』

『ならこっちよりB班の方行っちゃれよ……』

『えー、だってどう考えてもメンドクサそうだったしー。あの二人が険悪になりすぎてどうしようもなくなったらフォローに行くつもりだけど♪』

ま、あたしの事は気にしないで話を続けてちょうだい。ちょっと徹夜続きでね。悪いけど寝かせてもわうわ』

そう言うとサラはすぐに眠りについてしまった。

それからの時間、俺たちは目的の場所まで向かう途中、ブレードというカードゲームで遊んで時間を潰した。